

卒論・文学散歩・合宿

都留文科大助教授 阿毛 久芳

「大学四年間の締め括りとしての卒論がどういった意味を持つのか、卒業にあたってわからないかもしれない。書いた内容の持つ意味もそれぞれ異なっているように思う。ただ書いていた時間が、君達の大学生活のなかで濃密なものとしてあったことを、希望するばかりである。別れはあつけない。だが、別れた後に残る記憶の時間は続く。踏み出した先の生活が大事なのは、当たり前だ。そして方向を見失ったり、疲れて立ち止まったりしたとき、濃密な記憶の時間を開け放つ鍵として、卒論を振り返ってもいいだろう。間違いなく君自身がこれを書いたのだ。困難に立ち向えないはずはない。なつかしい時間をもっていることは、なんと快いことだろう。一九八九年三月二十二日——これは私のゼミの卒論文集を送る時に付した文章です。都留文科大では卒業論文が必修単位となっており、全員が書くことになっています。提出締切が十二月二十日（第一期）と一月十日（第二期）で、この時

期になると四年生の生活が一変し（？）、必死で原稿用紙に筆を走らせることになります。特に第二期に提出する学生は、新年を都留で迎えることになります。「皆さんからお節料理をごちそうになったのが忘れられない。」という心暖まる話を聞きました。調べること、読むこと、考えること、書くこと、これらを総合的に自分の研究対象に集約させ、卒論ができた

がるわけですが、おのずからどのような大学生活を過してきたのか、映し出される結果ともなりま

す。毎年行っているのですが、七月四日にゼミの三年生と文学散歩をしました。近代文学館、国会図書館、鷗外記念図書館、一葉記念館をまわったのですが、調べることに土地にふれることのきっかけになればよいとの思いがあります。集合場所の駅を乗り過す学生がいたり、缶ジュースを買っていた学生が、バスに乗り遅れてしまい、着いた先でその学生を待つ時間が長

かったりもしました。待っている間に一葉記念館の閉館時間が過ぎてしまい、諦めながらも行ってみると、たまたま館の職員の方の事情で閉館せず、「ゆっくり見ていってください。」と言われたり、反対に浅草の神合バー（有名なビアホール）が閉店日だったり、でも新宿のライオンでめでたくコンパ。——と悲喜こもごもの「こった煮」のような体験でした。こうした時に普段見られない学生の顔にふれられます。

夏休みの終わり頃、国文学科では卒論の中間発表としてゼミ合宿をするのですが、以前西湖で行った折、戯れに連詩（各自一行ずつ詩らしきもの？を書きつづる）を試みたことがあります。「けれど／色濃く化粧（かざ）することはやめた方がいい／さあいつもの／私にもどり／今は静かに静かに眠りましょう／西湖は深く静かだ／そして心はふるさとを向く」と学生達は締め括りました。化粧（かざ）らない都留の学生気質が思わず出たように感じました。

最近学生の下宿も個室マンション風のものが多くなり、生活パターンもその個室空間が中心となる傾向が強くなってきたようです。市民の方々と大学、学生との緊密な関係の必要性が一層痛感されるのですが、卒業後もこの都留をなつかしい故郷として訪れる社会人がいかに多いか、私は知っています。折しも今年、大学は四年制となつてから三十周年を迎えます。十月十四日（土）は、盛大に記念式典が催されます。市民の方々と卒業生との語らいの場が数多く見られることを、今から期待しています。

都留文科大 学章・シンボルカラー決定

都留文科大創立三十周年を記念して、大学の新しいイメージと一層の飛躍を期するため、学章及びシンボルカラーを募集したところ、市内外の方々より多数の応募が有りました。

学生投票の結果、学章につきましては提出責任者土橋薫氏、制作者保坂一十四氏（甲府市在住）、シンボルカラーにつきましては本学教授の河西万文氏の作品に決定しました。

なお、来る十月十四日の記念式典において作品の披露と表彰を行う予定です。

●学章

（表現）
○山梨県を代表する富士山
○都留市の「T」
○ユニバーシティの「U」と躍動感・未来への継続
●シンボルカラー
■紫味青（群青）
（財）日本色彩研究所 編著



色名帖 清色編
色相17 明度13 彩度6